

じいさんばあさん

奈良 敏行

(笈の定有)

一月五日(二〇二五) 仙台から堀内菜摘さんが見えた。

正月休みの四日間を鳥取で過ごす小旅行だ。鳥取は初任地で、旧友を訪ねる計画だった。『町の本屋という物語』には、堀内さん撮影の、定有堂店内の写真が掲載されている。まだ本棚の星座が崩れていないぎりぎりの末期に、たくさんの棚写真を撮り残した。メディアの取材は皆断つたのだが、この全国通信社の堀内さんと地元テレビ局のTさんの二人だけが店内を記録した。Tさんは少し遅れたので本棚の星座はすでに秩序を失っていた。なぜ二人だけが定有堂の棚を記録したかという点、二人はわたしの太極拳の生徒だった。名残を惜しんだメモリアルというそれだけの理由だった。

定有堂ビルで待ち合わせし、「希望の喫茶店がありますか？」と尋ねたら、民芸喫茶の「たくみ珈琲店」が「一度

行ってみたかった」という返事で、駅の方へ五、六分歩いて移動した。

堀内さんは仙台へ赴任して二〇二四年に、震災直後に一冊の雑誌を回し読みして、子どもたちの笑顔を取り戻した、「伝説のジャンプ」のその後を全国に配信した。廃業を告げる記事だった。堀内さんは本屋が好きなので、それは悲しい取材だった。でも大切な記憶を、自分の言葉で記事にできたのは、幸せだったかも知れない。

コーヒを味わいながら近況を交換した。わたしは映画『シビル・ウォー』を見た感想を述べた。メディアが主題だったからだ。主人公は女性カメラマン。カメラマンつながりで『横道世之介』の話もした。世之介もカメラマンなのだ。二つとも今わたしがすすみたい青春物語だった。堀内さんは二十代半ば、海外の特派員も夢見ている。映画の中の若手カメラマンジェシーと同じくらしい歳だろうか。雑談の中でわたしが知るある夫婦の話をした。二十代で結婚し記者の仕事で転勤を重ね特派員も経験し、やがて年を経て退職したのだが、いまだ別居生活が続く男性の話をした。ずいぶん前に二人は東京の近郊に家を建て、そこに互いの書物を数十年送り続けている。

本は絆なんだと印象に残る話だった。わたしは二十代の絆を断つて未知の土地を転々とする生活はできなかつた。

人への依存が強いからだ。それでも数年旅巡業の仕事を勤めた。早々にやめたのだが世間は孤立した静かな生活を許すものでもなかった。

そんな時、森鷗外の「じいさんばあさん」を読んだ。人生の最後に二人だけの生活にたどり着く話だ。堀内さんにこの本をすすめたが、その後読んだだろうか。

江戸時代一人の武家が屋敷内に兄のために隠居所を造るところから話が始まる。越前の国からその兄がやってくる。数日遅れでその細君が安房からやってくる。夫は七十二歳、妻は七十一歳、三十七年ぶりの再会だ。引き離された理由も当然あるのだが、年老いての再会というのが、なにか二十代のわたしに予感させるものがあった。

掌編で、別居中の夫妻の心理はまったく描写されていない。心理分析が少しもない小説だ。夫は刃傷沙汰で咎(とが)を受け越前の藩へお預けの身となる。しかし手跡や剣術を教えていたというのだが、なにひとつ具体的な記述はない。妻も大名家の奥へ仕え表使格という高い地位へ登る。これも説明は二行ほどで終わる。ただ三十七年を経て老人二人が再会し、何事もなかったように暮らすという話なのだ。絆はなんだったのだろう。書物だと面白いのだが、そんな記述はどこにもない。ただ武家の品格があるだけだ。

二十代半ばの堀内さんにいきなりこんな本をすすめるのは唐突過ぎたかもしれない。鷗外と漱石は同時代なのだが、『ごころ』は心理描写だけの小説だ。鷗外はすべてを受け入れ漱石は何一つ受け入れない。そうした個性の違いだろうか。

鷗外の短編には、受け入れて生きる、例えて言えば風雪に耐えて苔むす石のような味わいがある。三十年思いを抱えた、二つの人生があったはずだ。漱石なら当然長編にするだろう。三十七年の人生を一枚一枚剥ぎ落として、最後にただ二つの老いの姿を巡り合わせる鷗外の作品は、心を打つものがある。そぎ落とし、縮減したところに、始め直しの人生がある。「始め直す」ことができるのだということとを五十歳年下の若い人に言いたかったのかもしれない。まだ始まってもないのに。

2025.01.08

(参考)

吉田修一 『横道世之介』 文春文庫 2012

森鷗外 『山椒大夫・阿部一族』 (「じいさんばあさん」

所収) 角川文庫 1971